

## 研究ノート

## ウエスレー『旧約聖書注解への「序文」』をめぐって

重富 勝己

『旧約聖書注解への「序文」』テキスト<sup>1</sup> ジョン・ウエスレー

1 十年ほど前に私は説き伏せられて『新約聖書注解』を発刊することとなった。その仕事を始め、そして実際にそれが完成した時に、私にはそれに類するモノで更にそれを超える何かを試みようと言う考えはなかった。事実、とてつもない労力（もしそれだけなら、ほんのわずかの部分に過ぎなかったのだけれども）にすっかり疲労困憊してしまい、四つ折り版 7~800 頁以上を含む書物を書くなどということは決して二度としないという固い決意であった。

<sup>1</sup> 現時点ではオリジナルが入手可能ではないため翻訳の底本として、**The Master Christian Library Disc1 (Ages Software, Oregon, 1996)** 所収の **John Wesley** の当該ファイルを利用した。なお、全く同じものがノース・ウェスト・ナザレン大学のウエスレー・センターのホームページ上にて閲覧・ダウンロードできる

([http://wesley.mnu.edu/john\\_wesley/notes/otpreface.htm](http://wesley.mnu.edu/john_wesley/notes/otpreface.htm))。全く同じというのは筆者が気づいた限り、次の二つの文中に明らかな誤記が両者ともに存在するからで、下記のように修正した上で翻訳したことをお断りしておく。

〔段落 9〕中、".....it would so is an alteration ....."→".....it would so if an alteration ....."〔段落 18〕中、".....is you cannot do this,....."→".....if you cannot do this,....." 参照すべき他の邦訳を見いだせなかったので思わぬ誤訳、思い違いが多々存在すると思われるが、先学のご批判をあおぎたい。

2 しかしこれが発刊されるや、『旧約聖書注解』を書くようにしつこく求められたのであった。このしつこい懇請に対して、私の学習、理解、霊的経験不足を理由に何年も我慢し続けてきた。かなりの点において、新約聖書について書くことより困難な仕事に着手することは、旧約聖書には私自身が理解しなかった多くの章句があることや、そのために他人にもまた自らにも納得の行くように説明ができないので承諾しかねたのである。とりわけ時間不足を私は反対の理由とした。私には他のたくさんの仕事があるばかりではなく、私の寿命が尽きるのも近い。私は年の谷間へと向っている。そして私は、六十三歳の年齢に差し掛かる今日まで、この種の仕事に入るべきであると考えるのは、私には単なる夢、ほとんど信じられない何かに思えるのであった。

3 事実、これらの考慮すべき事（特に最後の点）が、なお私には非常に重きがあるように思えるので、旧約聖書全体への注解を書くという考えを心から楽しむことはできなかった。残されたあらゆる問いは「要約するに値するような、講解書が存在するのか。」であった。どれほど有り余る時間と、ありとあらゆる才能があってもそれだけでは充分ではない。この問いを考慮している時、すぐに私は非常に著名なヘンリー氏に考えを向けた。彼はさまざまな有能な批評家によって、強力な理解力、多様な学習、確固とした敬虔、神の道においては豊富な経験を備えた人物であると評価されている。彼の講解は概して明快で情報に富んでおり、その考えは簡潔な言葉で表わされている。また聖書の趣旨および信仰の類比に合致している。説明を必要とする章句に完璧にして十分な説明を与えている。他の大抵の注釈がなすよりも多くの点で、この靈感を受けた書物に深く、探求しようとしている。空虚な憶測で我々を楽しませることなどせず、徹頭徹尾実践的である。そして形式だけではなく、霊と真をもっていかに神を礼拝するかを教える点で霊的でもある。

4 しかし当然次の問いかけがなされる。「もしヘンリー師の講解が簡明で、健全で、完璧、かつ深みがあるだけでなく、実践的で霊的であるなら、他のものが存在する必要があるだろうか。あるいはこれを改良することが可能だろうか。すなわちより良いものへと変更することが。」私はこう答えよう。これ

を持っている多くの人には、これ以上の他の何も必要としない。特に、赦罪、無条件の予定の教理を信じている人にはそうである（それは作品全体を貫いており、そして彼らに多々推奨されている）。私はこれらの人にヘンリー師のものとは異なった他の注解で彼らを悩ませるようなアドバイスはしない。これは祝福された霊の助けによって、個々のキリスト者を救いに対して賢明で、（主が彼の言葉を適用して）あらゆる善い業に完全に備えられるようにするために充分である。

**5** しかし他方、誰もがこの注解を持つことができないことも明らかである。購入するにはあまりにも大きい。それを持つことで喜ぶたくさんの人もいるが、値段があまりにも高価である。この世界でおそらくその年の終わりから次の年まで **6** ギニー（ロンドンでの価格）を持つ人などいない。たとえまたま持っていたとしても、貯めるためではなく、他の状況のために必要とする。それゆえこの貴重な作品のために、一体いくら労働を願えば良いのだろうか。彼らはそれなしで生きること満足しなければならないのである。

**6** しかしよしんば購入する充分なお金があると仮定しても、彼らにはそれを読むための時間がない。大きさはその金額に見合った、とてつもなく大きなものである。額に汗して日々の糧を得るために労する人、その労働が一般には朝 **6** 時から夜 **6** 時まで働くことが制限されている人が、六巻以上の、それでいて一巻に **7**~**800** 頁以上含む書物を読む時間を見出せようか。これらの人はヘンリー師の注解より他のものが必要なのである。その種のものとしては秀逸ではあるが、彼らの目的にはそぐわない。彼らには買う金も読み切る時間もないからだ。

**7** それならこの作品を少なくとも要約することでそれに価値あるものと修正することは可能である。これへの最大の障害がその大きさであるなら、その障害は取り除くことができる。そして現時点でその大きさと高価さの故にそこから益を受ける可能性がない人たちが、少なくとも同じ利益をえて、もっとお金と時間を持った人と同じように楽しめるであろう。その注解を全巻所持していてもしかも読

む時間のある人でも、そこから引き出すものに関心を抱く人はほとんど居ないと推測する。しかし全巻を所持することができない人も（少なくとも現時点では）一部を持つことで喜べるだろう。あまりにも短すぎると不満を言う人も「彼らが長い作品を入手できるようになるまで」それで間に合うであろう。

**8** しかし私はこの貴重な作品をもっと簡潔にそして短くすることで、より価値のあるものができると思う。そこから引き出すことができるもの（続く巻の一部分をなすとしても）はオリジナルよりもより簡潔なものである。このために、そこかしこに散りばめられたすべてのラテン語の文章のみならず、教育のない人たちにはそれほど意味のないいかなる言葉や表現も省略される。全く教育を受けていない人たちと頻繁にかつ親しみ深く会話する人だけが、教育ある者にとってはごく当然の内容が、彼らにとってはいかに多くの表現がチンプンカンプンであるかが分るのである。私たちの会話を彼らと共通の〈会話〉能力へと替えるのは、読書することや、ましてや黙想することではない。現実には粗野な人たちと話をすることを通してのみ、彼らが理解するやり方で会話できるようになるのである。もしこれをしないならば、どのようにして彼らを益するだろうか。我々のすべての労苦を失わないだろうか。もし天使のように語っても、彼らにとって何の役にも立たないならば、やかましいドラやシンバルと同じである。

**9** それどころか私はヘンリー氏の作品から抽出したものが、ある意味でオリジナルよりももっと健全であることだろうと理解している。私を正しく理解して欲しい。私は、神はすべての人間が救われて、真理の知識に至ることを望んでおられるとの栄光ある言明に、より心地よさを意味している。この点を否定しないでいただきたい。すなわち、教理の点に関していかなる変更を加えることもそれは著者の意図を誤解させるし、結果的に傷つけることになる。もしその言葉に違った意味を持たせるために変更がなされたらなおさらそうである。また彼が書いてもいない事柄を彼の言葉として復誦するならばなおさらのことだ。しかしこのうち、どれも事実ではない。彼が書かなかったことを彼によって書かれたなどと繰り返されることは決してない。彼自身

の言葉とは異なったどのような構造物も彼の言葉の上に付け加えられていない。しかし特殊贖罪の立場に立って書かれたことは完全に排除された。そしてこのことについて、私はここで読者に一度ならずも明白な注意を与えている。

**10** もう一度（言う）。作品はヘンリー氏のものよりたつぷりと短くなるのは確かに可能であろうが、それにもかかわらず、ある特定の点ではより完全なものとなる。読者がすでにその意味を知っていることを当然として、いかなる説明もなしに過ぎ去るたくさんの語がある。しかしこれはなされてはならない仮定である。完全な間違いでさえある。例えば、オメルとかヒンとかについて、普通の人間が何を知っているか。「なぜ、モーゼは彼自身の意味を説明するのか。「オメルはエファの十分の一である」と。確かにそうだ。しかし正直な人間ならエファについて何を知っているか。オメルについても同じだ。ヘンリー氏がこれらを削除へ導いたのは、私が想像するには、そしてそれ以外では説明不可能なのだが、他の人たち、特にプール氏がかつて言ったことを繰り返したくないということである。これは彼自身の言葉から容易に集められる。「プール氏の英語の注釈は賞賛に値するほど用いられている。特に「聖書の語句を説明し、困難な用語の意味を開き、解明することにおいてそうである。私は勤勉に出来る限り、そこに見出される、なるだけ多くのものを拒否してきた」と。私は彼がそうしなければ良かったのにとと思う。あるいは少なくとも他の言葉で同じ意味を与えて欲しかった。事実、彼はこう付け加える。「これらの、そして他の注釈も、折に触れて調べられるには最も容易なものだからである」と。確かにそれらを持っている人にとってはその通りだ。しかしそれはヘンリー氏の読者一般には当てはまらない。そしてそれどころか、彼らはその注解が巨大すぎるのでどのような場合にも他の（注釈）を参照する場合などないことを正しく予測しているのである。

**11** 同様に、ヘンリー氏がなした以上にある聖書の箇所の意味について、より深く探求することは可能である。彼は一般的には、皮相な著者などでは決してないけれども、必ずしも一貫しているわけではない。事実、彼がもしそ

うできたなら、彼の仕事の膨大さを考慮するならば彼は人間以上の存在に違いない。人間の理解からするならば、このような多数の枚数を、時に反省や観察に没入することなしに、深さよりもむしろ活気で、仕上げて行くことはほとんど不可能である。広大な土地を囲んで幅広く流れる川はある処では浅くなるものである。もし適当な水路の中に制限されると、ずっと深く流れることになる。

**12** それどころか、ある聖書箇所の注釈がヘンリー氏のものよりも、より霊的であると同時に、より聖書に密接で実践的な注解書が可能であることも認めなければならない。人がそこにおいて、当然期待するキリスト者の実践の完全な枠組みを見いだすはずの出エジプト記の**20**章の講解においてさえ、その期待は完全には答えられない。また彼は我々に対して、霊的宗教についての、また我々の内にある神の国についての、あるいは心を支配しそこに住み給うキリストの実について、満足すべき説明を与える箇所を、どこにおいても私は思い起こせない。これは私が主の山上の説教の講解において特に見出そうと願ったことだ。しかし私の期待は失望に終わった。それはどのような意味においても私が期待したものではない。

**13** それ故、私はこのあとに続く注解で、ヘンリー氏の講解をそのまま要約することを、意図しない。それどころか私は彼が書いた**20**のうちの**19**を削除するだけでなく多くの追加と変更を最初から最後にいたるまで付け加えた。特に、私はあらゆる箇所、彼がその章を改善したり、推測したりした、はるかに多くの部分を除外した。この部分がこの著作中で最も価値があると考える人は著者自身を頼れば良いのだ。同様に私はまた、残されたそれぞれの注釈のかなりの部分を除外した。それが彼の目的と思える時はできるだけ多くを、私のそれならばできるだけ少ししか語らなかった。また多くの風変わりな表現や、「神は鳥を食べさせる。赤ん坊を食べさせないことがあるか。」「ファラオの王妃：むしろ彼の売春婦」のような生々しい反語表現を削除した。事実、<彼の注解書に>生じたこの種のすべての表現は、多くの読者が賞賛する花のようなものであると感じ、それどころか、多くの人たちは

これらがこの著書の主要な美であると理解することは疑いもないと思うけれども、私はまったく手をつけずに残しておいた（引用しなかった）。まさにその理由で私は、それらはこの中で場所を持つべきでないと望まざるをえなかった。これはきわめて、人々の気を引こうとする欠陥である。それを賞賛する人はすぐに真似るであろう。私はかつて私が高く評価する人が説教においていくつもの美しい転換をなしたことに驚いたものだった。しかしヘンリー氏を読んだとき、私の驚きは消えてしまった。私は彼らが彼のコピーをしているだけなのを見たからだ。彼らの多くはおそらく、もくろむでもなくそれに言及すらもしないで（そうしている）。彼らは普通に、しばしば説教の直前に彼らのテキストのために彼の注解書に相談するのである。だから、わずかの警句やある種の技巧が無意識に入り込んで、強くて男らしい弁舌が生じたのである。それらは彼らがそうでなければ靈感を受けた著者から学んだであろうものである。

**14** ヘンリー氏から採りだした中での変更については、私は継続的に困難な用語を易しくそして長い文章を短くした。しかし意識して、彼から採りだしたいかなる意味にも変更を加えなかった。ただいくつかの箇所（意味）がより明確に、決定づけられるように努力した。私はここかしこで、テキスト中の語句を変更する自由を行使した。しかしこれを私は控えめにした。私自身のヘブル語への不完全な習熟を意識しているがゆえに、あまりにも行き過ぎる冒険を恐れた上でのことだ。私はプール師から、普通の読者が必要と考えるものをできるだけたくさん、ヘンリー氏が説明しない用語を読者の理解のために、多くを追加した。それどころか、プール氏の聖書注解がより成熟したものと判断してからは（それは創世記を始めてすぐのこと）、ヘンリー氏よりもはるかに多くを彼から抽出した。テキストを読んだ後、先ずプール氏が各節について観察したものを読んで検討する。その後全体のパラグラフについてのヘンリー氏の注解を読む、これが私の不変の方法である。この結果として、ヘンリー氏には欠けているものを補うためにプール氏からの短い付加の替りに、（それは当初の私の企図だった）私は今やヘンリー氏からは、プール氏には欠けていて、なおかつ有能なものである限り、抽出するだけに

した。すなわち、有能なものである限りである。というのは、私は聖書を読んで考える時に、折に触れて私の心に起こってくることや、私が他の著者から時々抜粋した事と共に、両者のより深い観察を加えることを私は未だに必要としているからである。

**15** 物事を考える人ならみんな、今やこの後に続く頁の私の企図を容易に識別するでしょう。聖書のいかなる箇所についての説教や評論あるいは講義を書こうとするのではない。テキストから推論を引き出すでもない。そこらからいかなる教理が証明されるかを示すことでもない。こうである。神の言葉のあらゆる語、あらゆる節、文、から直接的、字義的な意味を与えることである。文字盤の針のように、私はあらゆる人にこのことを指し示すことを計画している。すなわち他の何事かに、たとえそれがいかに優れていようと、心を惑わされないこと、そして聖書そのままに目を注ぎ続けること、それによって彼が理解力を持って読んだり聞いたりすることです。もう一度言います。（そして誰もそこから見出せないものは期待しないように、ということをよく遵守されるように）聖書から離れて読むような一冊の書物について書くのが私の計画ではありません。そうではなくて聖書そのものを読み聞きする際に、何とかして神を畏れる人をあらゆる箇所の自然な意味を、出来る限りわずかでありつつ、そして簡潔な言葉で示すことによって手助けすることである。

**16** そして私は、これに続く注解が、無教養な人や無学な人だけでなく教育と学習のある人にも、ある程度この目的に応えることに希望がないわけではない。（この著作も『新約聖書注解』のどちらも第一義的には彼らのために計画されていない、ということも事実ではあるけれども）私は確信している。最も簡明にして単純な様式で書かれたトラクトは、最高の技量と大いなる虚栄の博識によって苦心して作られたものより、私にとっては無限大により大きな貢献である。

**17** しかし教養がある人あるいは無学な人のどちらかを思考のトラブルから

救い出すことは私の企図ではない。もしそうならば私はおそらく、思考を助けるよりもむしろ（トラブルを）上塗りするだけの二つ折り本を書くことになろう。反対に、私の意図は彼らに考えさせ、思考する中で彼らを手助けすることである。これが神の事柄を理解する方法である。そして日夜、神について黙想し、最もすぐれた知識を得、唯一にして真実の神とその御方が送られたイエス・キリストを知ることである。そしてこの知識は、まずこの御方があなたを愛されたが故に、あなたをその御方を愛することへと導いてくれる。そうです。あなたの心と魂と知識と力のすべてをもって主なるあなたの神を愛することへ、です。キリスト・イエスにある心があなたの中にないでしょうか。この結果として、あなたは喜びをもって、この書物中に記述されているあらゆる聖なる気質を経験する一方で、あなたを召し出された方は聖なる方であるので、会話のすべてにおいてもあなたは同様に外的にも聖なるものとなるでしょう。

**18** もしあなたが、最も効果的にこの目的に応えるようなやり方で聖書を読むことを願うならば、以下の事柄が忠告されるでしょう。

- a. その目的のために毎朝毎晩、できるならわずかの時間を聖別すること
- b. もし暇な時間があるならその度に、旧約から一章、新約から一章を読むこと。もしこれができなければ、どちらか一章かその一部分を。
- c. これを見据えた目で、神の全意志を知るために読むこと。そして彼の意志を知るために、あなたはそれを行う確かなる決断を！
- d. 信仰の類比に絶えず注目すべき。偉大にして根本的教義である原罪、信仰義認、新生、内的・外的ホーリネス、これらの間にある関連と調和。
- e. 神の言葉に聞こうとする時、「聖書はそれが与えられた聖霊を通してのみ理解される」ことを理解して、真剣にして熱心な祈りが絶えず捧げられるべき。私たちが聖書を読むときも同様に、読んだ内容が私たちの心に刻まれるように、祈りをもって閉じられるべき。
- f. 私たちが聖書を読む間、しばしば立ち止まり、読んだ内容によって心と体の両面に関して自らを検証することは有益である。これは私たちにほめ称えの内容を備えてくれる。そこで私たちは神がその祝福された御旨に叶って

生きることを私たちに可能にしてくれ、また私たちが欠けを覚えたところで、謙遜と祈りの事柄を（備えてくれる）。そしてその時どのような光をあなたが受けるにしても最も高貴な目的のために直ちに用いられるべきである。遅滞はゆるされない。あなたが何を決断しようとも、できると思うその瞬間から実行しなさい。そうすれば、事実この言葉が現在と永遠の救いへと導く神の力であることを見出すであろう。

エディンバラ

1765年4月25日

## I はじめに

ウェスレー『新約聖書注解（以下『NT 注解』と略す）への「序文」』<sup>2</sup>に記された日付 **1754年1月4日**と上記『旧約聖書注解（以下『OT 注解』）への「序文」』に記された日付を較べるならば、両者の間にほぼ十年の歳月が流れていることがすぐに見てとれる。ウェスレー神学の成熟期と言われる **5～60**歳台に成立した同じ性質の二つの著作であるが、後者は前者に比して、極めて異なった評価を受けて来たといえる。

それは、アーネットが「ウェスレーの著作の中で『OT 注解』は最も知られておらず、また最も無視されている。……**1897—1956**の**60**年間の **Wesley Historical Society**の紀要のインデックスにおいて『OT 注解』への言及はたった二回。入手の困難さも一因である」と問題点を指摘しているのがその第一

<sup>2</sup> **An Explanatory Notes Upon The New Testament, London, 3rd edition, 1950. p10.** 松本卓夫、小黒薫訳『新約聖書注解』（新教出版社、1970年）5頁。なお、『NT 注解』と同様に『OT 注解』の原文タイトルは "**An Explanatory Notes Upon the Old Testament**" であって直訳は「旧約聖書への説明的ノート（注釈）」である。即ち、ウェスレーが参照した **Matthew Henry** 等の注解書の「注解」に該当する英語としては、**Commentary, Exposition, Annotation**, 等の術語があてられており、また後述するようにウェスレー自身が「要約(bridge)」したという著作の性格上、"**An Explanatory Notes**"の"**Notes**"に近代的な意味での「注解」をあてることには留保が必要と感じている。しかしながら、本稿では上記注2の邦訳が『注解』を使用している点に一応、敬うこととした。

である<sup>3</sup>。テキストそのものの「入手の困難さ」はテキスト研究をする上での致命的瑕疵となって立ちはだかる<sup>4</sup>。

さて「ウエスレーと聖書」という主題で、その釈義方法論や解釈原理について「ウエスレーの四支柱 (Quadrilateral)」を中心に論じられ、少なくはない研究が近年活発になされているが<sup>5</sup>、アーネットが上記のコメントに続けて『OT 注解』については、博士論文を書く人もいないと嘆息したように、『OT 注解』そのものをテーマとして採り上げた先行研究が極めて少ないのが現状であった。

しかしながら 1977 年になって、ロバート・カストが『OT 注解』について特に釈義的方法論に焦点を当ててはいるが包括的研究と言ってよいものを博士論文で採り上げた<sup>6</sup>。本稿は特にこのカストの研究に負っている。さらに幸いにも近年では、厳密な本文批評に耐え得るとは未だ言い難いが、CD-Rom などのメディアやオン・ラインで『OT 注解』テキストを参照することも可能になってきたことも本稿の前提となっている。

<sup>3</sup> William W.Arnett, "A Study in John Wesley's Explanatory Notes Upon the Old Testament", *Wesleyan Theological Journal* (以下、WTS) Vol.8#1,1973.On-Line 版のため、頁数の記載なし。

Robert M Casto, "Exgetical Method in John Wesley's Explanatory Notes upon The Old Testament", (Ph.D.dissertation, Duke University,1977),p197. カストによれば伝記史家シュミットすら、たった一度しか言及していないという。

<sup>4</sup> 唯一の再版といえるものはほぼ二百年後の 1975 年の Schmul 版 (フォト・コピー版) まで待たねばならないという状況である。しかし本質的問題は『NT 注解』に比して、なぜ『OT 注解』は再販を一切不要とするほど不必要なのかという点を神学的に検証することである。本稿 [7] 参照。

<sup>5</sup> 1980 年代以降のもので筆者が参照したものとして、

\*Scott Jones, *John Wesley's Conception and Use of Scripture*(Abingdon,1995).

\*Donald A.D.Thorsen,*The Wesleyan Quadrilateral: Scripture, Tradition, Reason, and Experience as Model for Evangelical Theology* (Zondervan,1990).

\*Thomas C.Oden, *John Wesley's Scriptural Christianity* (Zondervan, 1994) .

\*Robert W Wall, "Toward a Wesleyan Hermeneutics of Scripture" (WTJ #30-2,1995).

\*RLarry Shelton, "John Wesley's Approach to Scripture in Historical Perspective" (WTJ#16-1,1981).

\*Stephen Gunter,[et al.], *Wesley and the Quadrilateral-Renewing the Conversation* (Abingdon,1997).

<sup>6</sup> Casto, 注 3 を参照。

本稿は、2004 年 9 月 13 日に催された日本ウエスレー・メソジスト学会における研究発表に基づいている。同席上において旧約聖書に対する「ウエスレーのイスラエル観」や「ウエスレーのホーリネス」について重要な問いかけを受けた。それに対する何らかの応答を含む論考の必要を感じていたが、本稿に含めるには主題が拡がり過ぎると判断し、『OT 注解』そのものの内容には立ち入らず、『OT 注解への「序文(Preface)」』に焦点を絞って考察することとした。

それは前述したようにテキスト入手の困難さと膨大さが主因でもあるが、ウエスレーはその著作の冒頭に「序文」を書くことを常としており、その分析だけでもウエスレーの神学的姿勢をかいま見ることが可能であるし、意義があると考えたからである。特に『NT 注解「序文」』との比較や日誌および文献研究により、ウエスレーの注解執筆時の諸問題に言及できればと願っている。本格的な研究は『OT 注解』の全 (あるいは部分的) テキストへの批判的研究に抛らねばならないことは言うまでもない。

本稿では『OT 注解への「序文」』邦訳が見あたらなかったためこの度、まず「序文」全体の拙訳を冒頭に掲載した。段落ごとに付されている番号は、[段落 1] という形で本稿中で言及しながら、論述する形式が採られている。

## II 執筆の背景

ウエスレーは以下に述べる理由で『OT 注解』執筆に深い躊躇を覚えていた。まず第一の理由は、ほぼ十年前に『NT 注解』を発刊した経験にさかのぼる。その執筆期間について、ウエスレーの日誌では 1754 年 1 月 6 日 (『NT 注解「序文」』日付では、1754 年 1 月 4 日である) にブリストル郊外の温泉地で書き起こされ、同日誌の 1755 年 9 月 23 日「新約聖書注解を書き終えた」とあるので、この間のほぼ 630 日にわたって執筆作業が続けられたことが判る。

この『NT 注解』は最終的にはロンドンで四つ折り版 759 頁、一冊 18 シリングで売られた。そしてこれはウエスレーが生きている間も第五版(1790 年)まで再版が繰り返され、三巻本で発行された第三版 (1760-62) は 1768 年に

一巻本となった<sup>7</sup>。『NT 注解』は『標準説教集』とともにメソジスト神学の具体的、かつ霊的な標準として機能するようになり、大きな成功を収めたと評価されて良いだろう<sup>8</sup>。

さてその『NT 聖書注解「序文〔段落 2〕』において、執筆の動機について窺い知る状況がある<sup>9</sup>。

「わたしの生命の日はよほど終わり近くなっている。健康の状態にも、夕べの影が忍び寄ってきている。ことに、現在、病弱のため旅行や伝道には堪ええないし、別に何もできない境遇にあるので、こうした方面で、できるだけのことをして置こうという気になった」

1753年11月、ウェスレーが五十歳代に入ったばかりのこと、彼の健康は極度に悪化していた。ハイツェンレーターによればこの時、自らの墓碑銘「ここに一度ならずも火から焼け出された燃えかすであるジョン・ウェスレーの体が横たわる。彼は51歳のその年齢でたった10ポンドもあとに残さずに、神に「何の役にも立たないしもべである私に憐れみを」と祈りつつ、肺炎で死んだ」との文章を遺すほどの覚悟であったという<sup>10</sup>。そしてそこで治療のために数週間の療養を余儀なくされていた。『NT 注解』はウェスレーが直面した肉体的現実が執筆の動機と深い関連を持っていたと想像される。

しかしながら幸いにも健康は守られ、ウェスレーはその仕事を驚異的な精力でやり遂げるのである。それはまた、「事実、とてつもない労力にすっかり疲労困憊してしまい、四つ折り版七〜八百頁以上を含む書物を書くなどということは決してしないという固い決意」〔段落 1〕すら抱かせる結果をもたらすこととなったのである。

『OT 注解』執筆を始める際の思いは、むしろ『NT 注解』執筆時よりも肉

<sup>7</sup> Casto, op.,cit., p.212.

<sup>8</sup> Casto, op.,cit.,p.4. Richard P. Heitzenrater, *Wesley and the People Called Methodists*, Abingdon, 1995, pp.212-213.

<sup>9</sup> 翻訳はやや古いものになるが松本卓夫、小黒薫訳『NT 注解』新教出版社、1960年、を参照した。ただし原文 (*Explanatory Notes upon the New Testament*, Epworth Press, 1950 edition) とつき合わせて見たところ、かなりの不満を感じたが時間の関係上そのまま引用する。なお本稿中〔段落 1〕等と記されている段落番号もこの翻訳に拠っている。

<sup>10</sup> Heitzenrater, op.,cit., pp.187-8.

体的にも年齢的にも不利になっていることは明らかであり、ウェスレーはそれをより良く自覚していた。「私の寿命が尽きるのも近い。……六十三歳の年齢に差し掛かる今日」と自らの年齢まで挙げて「私には単なる夢<sup>11</sup>」とさえ言う〔段落 2〕。〔段落 3〕の冒頭「これらの考慮すべき事（特に最後の点）」としている部分は文脈から自分の年齢に言及していると見られる。

さて躊躇のもう一つの要因は「時間不足」である。『OT 注解』はウェスレーの日記 1765年5月13日「本日、『OT 注解』にとりかかる時間ができた」と記しているその翌日にはある友人（脚注では John Newton）に手紙を書いている。この時期、そして翌年にかけて、John Newton, John Fletcher らとかなりの量の手紙のやりとりを繰り返しているのは、「完全論」についてのカルヴァン派との激しい神学論争に忙殺されていたからである<sup>12</sup>。藤本満氏によれば、この時期は後期ウェスレーの神学成熟過程の開始期としてとらえられる。それはまた、増え続けるソサエティのためにかかなりの数の教区巡回旅行をこなし続けている、知的にも肉体的にもハードな日々であった<sup>13</sup>。

さらに躊躇の第三の要因を敢えて挙げるとするならば、「私の学習、理解、霊的経験不足」である。それに加えて「私自身のヘブル語への不完全な習熟

<sup>11</sup> 『NT 注解』『OT 注解』いずれも、最初から一冊（実際には『OT 注解』は三巻本になった）の書物の形で発行されたと我々の常識にあてはめて考えてはならない。クアルト (quarto: 四つ折り、すなわち表裏で8頁。またある場合は folio: 二つ折り4頁) を数枚綴った形のもので講読予定者に対して定期的に発刊され続け最終的に一巻とされた。参照: ジョン・カーター、横山 (訳) 『西洋書誌学入門』図書出版、1994年、23~24頁。十八世紀英国の出版事情に関しては、清水一嘉『イギリス近代出版の諸相』世界思想社、1999年、3~11頁、83~100頁。清水によれば「この時期、イギリス出版界は大きな変貌をとげた」。

<sup>12</sup> *Journal and Diarie*, p. 508. および脚注 32.

<sup>13</sup> 藤本満『ウェスレーの神学』福音文書刊行会、1990年、78~87頁。同87頁で紹介されているロイズ・イブニング・ポスト(1772.1.20)のウェスレー評はその好意的評価とともにウェスレーの八面六臂の働きぶりを伝えており興味深い。「1765年5月27日から1768年5月5日までの期間、この熱心で勤勉なメソジストの宣教師は……アイルランドのほぼ全域とスコットランドを二回にわたって巡回し、……ウェールズのほぼ全域とイングランドのほとんどすべての地域を馬の背に乗って伝道旅行している。」ウェスレーの『OT 注解』執筆は、このような多忙な期間と全く重なり合っている。

を意識している」〔段落 14〕とあるが、これらはかなり控えめに受け止めなければならない。なぜなら『NT 注解序文〔段落 1〕』においても「自分の能力の足りなさを痛感し、そのような著述を企てるほどの素養もなく、経験にも智慧にも欠けていることを自覚している」と謙遜しているからである。

事実、ギリシャ語の文法書を書いてそれを教えギリシャ語新約聖書の翻訳をものにしたウェスレーは、旧約聖書原語であるヘブル語についても秀でた運用能力をもっていたと考えられる。ウェスレーはチャーターハウス在籍時に兄とともにヘブル語を学びはじめた。カスト(Robert M.Casto)が伝えるひとつのエピソードとして、父サムエルがジョンの助けを借りて旧約聖書ギリシャ語訳(いわゆる七十人訳)の出版を目論んだことがある。それは、ヘブル語とヴルガタの本文をサマリア語写本(旧約聖書の律法の五書部分のサマリア語訳)で修正するという、きわめて高度な本文批評的技術を要するものであって、父サムエルのジョンに対する全幅なまでの信頼感が見てとれる。やがて 1751 年にはヘブル語の小文法書を書いている<sup>14</sup>。

以上の三つ、体力・時間・能力が『OT 注解』執筆へと向かわせることを阻む主要な理由であったことを『OT 注解への「序文」』にてウェスレーは言及する。もっとも、最後の能力についてはウェスレーの謙遜からの表現と理解する方が無難と言えるかも知れない。

### III 執筆の方法に関して

ウェスレーの注解の執筆方法は『NT 注解』の前例を見ても判るとおり、先行する既存の良質な注解書を要約(abbreviate)する形でなされる。『NT 注解』の場合は、その『NT 注解「序文」〔段落 7〕』において、「私自身の心に浮かんだものだけを書き記そうと計画した」といったんはオリジナリティを示唆しながら、「しかしキリスト教界の偉大な光である(最近死去した)ベンゲル

<sup>14</sup> Casto, op.cit., pp. 203-4, さらに pp.112-122 参照。ウェスレーがドイツ語、オランダ語、フランス語の文法書も書き、ジョージアでは実際上の必要からスペイン語も学んでいることはよく知られた事実である。その言語運用能力はただただ驚嘆するばかりである。

(Bengelius)を知るに及んで、ただちにわたしは、全然自分の計画を変えてしまった。それは彼の「新約聖書指針(Gnomon Novi Testamenti)を単に翻訳するだけでも、新約聖書について多くの書物を書くよりも、信仰に資するところが多いと堅く信じたからである」と方針転換をしている。

さらに『NT 注解序文〔段落 8〕』では、「同じように、いくつかの有益な見解をヘイリン博士(Dr.Heylyn)……ガイス博士(Dr.Guyse)……ドッドリッジ博士(Dr.Doddridge)」のそれぞれの著作からも引用していることを言明する。

上記にすぐ続けて「これらの人たちから取られた注には残らず、出典である著者の名を付すべきではないか、という疑いが、しばらくの間、わたしにはあった……特にほとんど著者の用語のまま、あるものは転記し、もっと多くのものを簡略して記したことを考える時、……わたしはだれの名も付記しないことに決めた」とする点、『NT 注解』について、どこからどこまでがウェスレーのオリジナリティなのかというテキスト批評に基づいた先行研究が充分でない<sup>15</sup>。

〔段落 3〕では、同様の事情が『OT 注解』執筆の経緯の中にも存在したことが述べられる。すなわち、どこにウェスレーのオリジナリティがあるのかという問題は厳密なテキスト批評による比較研究に基づかねばならないが、カストはその研究でウェスレー自身のコメントは旧約全体で平均 0.83%という数字を実証的に提示している。この数字は旧約各巻によってバラツキがあり、比率の高いもので申命記(4.41%)、ハバクク書(3.42%)、サムエル記上(2.49%)、ダニエル書(2.30%)、マラキ書(1.90%)、ヨエル書(1.52%)、であり逆に比率の低いものとしては、エレミヤ書(0.09%)、イザヤ書(0.15%)、アモス書(0.29%)、ミカ書(0.30%)であり、オバデヤ書、ナホム書、ハガイ

<sup>15</sup> T.J.キッチンによるとベンゲルの『グノモン』以外に言及されている他の三者の著作については入手が不可能であって、比較研究はできない状況であるという。(T.J.キッチン「ウェスレーの新約聖書注解について」『ウェスレーとメソジズム双書6』日本ウェスレー協会、1972年、31頁)さらに『NT 注解』中、「黙示録」はベンゲルそのままとも言われる。Gregory S.Clapper, John Wesley on Religious Affections: His Views on Experience and emotion and Their Role in the Christian Life and Theology, Abingdon, p.22 も参照。



書にはウエスレーのコメントの追加すらない。これらの数字を、高いあるいは低い（からウエスレーの貢献度が少ない）という次元で評価するのではなく、コメント自体の神学的内容によるべきである<sup>16</sup>。

さてウエスレーはこの事情を『NT 注解「序文」』の順序に即して『OT 注解「序文」』にも応用して展開した。『NT 注解』ではオリジナリティを若干でも示唆したのだが、「残されたあらゆる問いは要約するに値するような、講解書が存在するのか？」と今回はもっと直接的に問い、「すぐに私は非常に著名なヘンリー氏に考えを向けた」と、『NT 注解』執筆の際のベンゲルにあたる種本として、マシュー・ヘンリー氏の注解書 (*Matthew Henry's Commentary, Vol.1 ~6*)<sup>17</sup> を要約するに足るものと見定めたことを表明する。

ヘンリー氏自身の人となりについても「強力な理解力、多様な学習、確固とした敬虔、神の道においては豊富な経験を備えた人物」であると絶賛し、さらにその注解は「明快で情報に富んでおり、その考えは簡潔な言葉で表されている。…徹頭徹尾実践的である。そして形式だけではなく、霊と真とをもっていかに神を礼拝するかを教える点で霊的でもある」と高く評価する。

しかしながらヘンリー氏については、その「特殊贖罪」という教理的内容〔段落 9〕から、また記述のスタイルから〔段落 8〕、また倫理への言及の欠如〔段落 12—特に「出エジプト記」二十章で期待される筈の實踐倫理！〕から、かなりの留保を持つようになり、やがてヘンリー氏よりひと世代前のマシュー・プール氏 (*Matthew Poole*)<sup>18</sup> の注解書に重点を置き換えたことも言明する。カストによれば、プール氏の注解への乗り替えは、その引用と考えられる文章数から「レビ記」以降と統計的に実証されるという。旧約全体で 70% がプール氏の注解からの引用であるのに対し、「創世記・出エジプト記」

<sup>16</sup> Casto, *op.cit.*, pp.337–8. 他の著作からの引用に関して、著作権という観点からの単純な疑問が残るが、ただ、我々現代人の著作権という考え方をウエスレーの時代に安易に適用することは控えつつ今後の課題としたい。

<sup>17</sup> *Matthew Henry (1662–1714)*, 生涯のほとんど(1687–1712)をチェスター長老派教会牧師として過ごし、*Exposition of the Old and New Testament, Vol.1-6 (1708–10)* を著した。

<sup>18</sup> *Matthew Poole (1624–1679)*, "*Annotations upon the Holy Bible, Vol.1-2*" は彼の死後出版 (1683–85) である。

ではそれぞれ 10% に過ぎないからである<sup>19</sup>。

#### IV 執筆の動機——対象と目的

1 それならば「もしヘンリー氏の講解が簡明で、健全で、完璧……実践的で霊的であるなら、他のもの（注解書）が必要」〔段落 4〕であるのか。この答えが第一義的な執筆の動機となる。それは一にも二にも、ウエスレーが念頭に置いている読者の存在と考えて良い。ウエスレーの読者はヘンリー氏の注解書六巻本を「購入するにはあまりにも大きい。……値段があまりにも高価である」〔段落 5〕と、普通の労働者が購うにはあまりにも高価過ぎることに言及する。それに加えて、高価な金額に見合った分量は「額に汗して日々の糧を得るために労する人、その労働が朝 6 時から夜 6 時まで働くこと……六巻以上の、それでいて一巻に 7~800 頁以上含む書物を読む時間を見いだせようか<sup>20</sup>。」と、時間のなさも大きな障壁となっていること、要するに「彼らには買う金も読み切る時間もない」〔段落 6〕という重たい現実を認識することから出発しなければならないことを述べる。

経済的理由（貧しさ）と時間的理由がウエスレーの読者にとっての最大の障壁であるとするならばそれを取り除くために、「少なくとも要約することで価値あるものと修正することは可能である」〔段落 7〕。要約の手段は、「ラテン語の文章のみならず、教育のない人たちにはそれほど意味のないいかなる言葉や表現も省略される」〔段落 8〕と、単に短くすることばかりに精力が注がれるのではなく、「ヘンリー氏の作品から抽出したものが、或る意味でオリジナルよりももっと健全であること」〔段落 9〕を目指している。

以下〔段落 8~14〕は、ヘンリー氏の注解をどのように利用し、かつまたヘンリー氏の注解との自らの注解の特徴との相違点を詳述する。ただし、〔段落

<sup>19</sup> Casto, *op.cit.*, pp.215. レビ記は 95% がプール氏による。

<sup>20</sup> 筆者の手許で参照できる "*Matthew Henry's Commentary*" (日付なし。Dr.C.Trumbull が寄せた序文から 1935 年以後の発行と推測) には、印刷上の問題故か頁数が入っていないので総頁数を (数えない限り) 残念ながら確認できなかった。なお、この注解書も幾つかの版の存在が推測されるので、実際にウエスレーが参照したオリジナルはどれなのか等の本文照合上の研究にも困難が生じる。

3~4]でのヘンリー氏の注解の内容についての賞賛と比較するならば、この部分はヘンリー氏の注解への批判が際だっており、内容の統一性にやや違和感があるかもしれない。

しかしこれは〔6〕文献史で後述するように、『OT 注解』本文と並行して「序文」が書かれた証拠と見なされ得る。「プール氏の聖書注解がより成熟したものと判断してからは（それは創世記を始めてすぐのこと）」〔段落 14〕とするなら、すなわち『OT 注解』「出エジプト記」以後の内容がプール氏の注解への依拠に移ったのであるならば、〔段落 3~4〕のヘンリー氏への依拠の強調には修正が加えられて良さそうなものと想像される。しかし現実には「序文」は『OT 注解』執筆完成後ではなく、ある程度の執筆が進んでいる段階で序文が書かれたと推測する根拠ともなるのである。

2 しかしウエスレーの読者の対象は誰かという点に関しては明白であり、ここが最も重要で執筆目的とも重なる。そのことはかつて『NT 注解「序文」』においても、また『説教集序文』においても主に対象とされている「無教養な人や無学な人」のために書くことが主目的なのである<sup>21</sup>。「教育と学習のある人にも、ある程度この目的に応えることに希望がないわけではない。……どちらの（著作も）第一義的には彼らのために計画されていない」〔段落 16~17〕

ウエスレーの執筆の目的は明白に言明されている。「神の言葉のあらゆる語、あらゆる節、文、から直接的、字義的な意味(literal meaning)を与えることである。……何とかして神を畏れる人をあらゆる箇所其自然な意味を、出来る限りわずかにして、簡潔な言葉で示すことによって手助けすることである」〔段落 15〕。「直接的、字義的な意味」について、我々はウエスレーの聖書解釈原理について言及しなければならない。しかし、この点については〔はじめに〕

<sup>21</sup> 『NT 注解「序」』p1. 竿代、勝間田、藤本訳『ジョン・ウエスレー説教 53 (上)』インマヌエル総合伝道団教学局、1995年、「ウエスレーによる説教集への序文」〔段落 2~3 「私がここで真実に意図していることは、(普段、私が語っているように)大衆に向けて(ad populum)書くことです。私が意図しているのは、飾り気のない人々のための飾り気のない真理です」〕。

でも述べたように、「序文」に研究対象を限定したので、別項に譲りたいと思う。

ウエスレーは購読者への弁明の手紙で<sup>22</sup>、「私がこの仕事をお金のためにしていると思う人がいるなら、私にとってお金は何ほどのモノであるか。もし自分自身のためならば、この仕事がどれだけ短ければ良いのと思う。私はすっかり飽き飽きしているからだ。ただ読者のためだけにしているのだ」と述べている。

なお、これに付記して、「十年ほど前に私は説き伏せられて……」〔段落 1〕および『OT 注解』を書くようにしつこく求められた」〔段落 2〕とあるが、ウエスレーを「説き伏せた」り「しつこく求めた」のは誰かという問いかけが当然なされよう。これについては、『NT 注解』の成功に味を占めた出版側の外的要因は完全に排除できるだろうか。純粹にメソジストの指導者の薦めやウエスレーの読者やソサエティの霊的要望という内的要因だけであろうか。後者が有力のように思えるが、複合的な要素も含めて今後の課題としておきたい。

## V 『OT 注解』の読み方

目的で述べられたように『OT 注解』が「最もすぐれた知識を得、唯一にして真実の神とその御方が送られたイエス・キリストを知ること」〔段落 17〕が究極の目的とされるならば、更に我々も日常的に「召し出された聖なる方」にならって「同様に外的にも聖なるもの」となるために、具体的な指示が六項目にわたってなされて終る〔段落 18〕。これは極めて実践的な指示であって、これはウエスレー自身のデボーショナルな実践生活を反映していることは疑い得ない。ウエスレーは自ら実践すると共に「日々の必要の糧を求める人々の生活」に向けた神学を展開したのである<sup>23</sup>。

当初、ヘンリー氏の注解を選定した理由として、豊富な情報量、簡潔な言

<sup>22</sup> Casto, op.,cit.,pp.204, Letters 5:13-14.

<sup>23</sup> Casto, op.,cit.,p.61.

葉という文体論的な理由にとどまらず、「聖書の趣旨および信仰の類比」および「徹頭徹尾実践的である」こと、さらに「靈的でもある」ことを理由にあげた〔段落3〕。

これらの原則が最後に繰り返される。興味深いことに、ここで解釈原理としての「信仰の類比」(4)に再び言及したウェスレーは、それだけでなく聖霊を通しての確証(5)、および、「心と体の両面に関して自らを検証する」とあるように体験的検証(6)に言及する。これらは祈りをもってなされなければならない。これらはウェスレーが生涯にわたって探求しようとした神学の実践であろう。

## VI 執筆の時期——「1765年4月25日 エディンバラにて」

『OT 注解「序文」』の最後に記された日付は、ウェスレーが書き始めた時期を表わすものなのか、それとも書き終わった時を表わすものなのか。まず、前述したように1765年5月13日の日記に「本日、『OT 注解』にとりかかる時間ができた」とある日付が「序文」日付よりあとであることから、後者の完成の時点という可能性は消えることになる。それではいつごろから、いつまでにわたって執筆されたのだろうか。

その前に、『OT 注解』の文献史に関して簡単に言及したい。グリーン、ティアマンの伝記に則って、カスト、アーネットが再構成した印刷出版までの経緯は以下の通りである<sup>24</sup>。

### 1 『OT 注解』のテキスト

『OT 注解』のテキスト自体はウェスレーの他の出版物と異なって、第一版(1765年)しか発行されなかったのが比較的はっきりとしており、本文批評上の問題はないと言える。再版は誤記もそのまま、1975年の Schumil 版3巻まで確認されていない。

<sup>24</sup> Arnett, op., cit., Casto, op., cit., pp204–224.

### 2 『OT 注解』の計画から出版まで

『OT 注解』は予約購読者を募って発行されるという形をとった。

#### i) Lloyd's Evening Post (1765 June 5) に次のような広告が掲載される。

「8月1日(木)にジョン・ウェスレー氏著『OT 注解』第一号が6ペンスで発刊される。条件1. 超上質紙に四つ折り版で印刷される。2. 60号(出来るだけ近い数値で)が二つの美しい巻を構成する。3. それぞれ1号に三枚の本文が新しいタイプで印刷される。4. 最初の号は見本と考えられて、もしそれが認められなかったら、払ったお金は返還される。5. 作品は創刊号のあと毎週毎に予約購読者に中断なく引き渡される。6. 全体は優美な状態で印刷され、今まで大衆に提供されたどの種の傑作に劣ることはない。ブリストル: ウィリアム・パイン印刷。J.Fletcher 社出版。ロンドン、セント・ポール教会内。」

すなわち、予約購読者には毎週毎に四つ折り三枚の本文(「クアルト」と呼ばれる表裏で八頁x三枚、計二四頁)の文章が一号ごとに届けられるというのである。そして当初の計画では、エズラ記で始まる二巻もの(60号)で終る予定であったが、実際には110号まで膨れあがり(二四頁x110号、ほぼ2,640ページ)全体で三巻となった。それぞれのフロント頁に巻数を表記する必要から、出版社側から全体の規模を尋ねる問い合わせをウェスレーは頻繁に受けている。

#### ii) 計画の変更

1766年1月23日、ウェスレーは計画の規模が予想を超えることを T.Rankin に手紙にしたためた。「号数はおよそ百号に膨れあがると考えて欲しい。……しかしすべての説教者はそれを望むなら、半額で得る。」(JW letters, Jan.23 1766)

最終号の執筆は1766年12月24日で、ウェスレーがこの日までに著作を完了したことを示唆する。Lloyd's Evening Post の広告に確定されたスケジュールでは、結果的に110号になった最終号は1767年9月10日に出ることになっていたが、二巻目、三巻目にまとめられる時、題名の頁にはすべて『OT 注解「序文」』の日付である1765年4月25日が掲げられた。

1765年5月13日の日記に『OT 注解』に向う時間ができた」とあることは

前述したそのあとに、ジョン・フレッチャーらと「完全論」についての幾つかの手紙のやり取りを繰り返す。すなわち、さまざまな神学論争と増え続ける組会を訪問する仕事で、中断を強いられたことが容易に想像され、当初の計画の変更を余儀なくされたのである。

### 3 執筆の時期

「序文」の日付(1765.4.25)は、本体が書かれる前に書かれたのだろうか。1765年5月13日の『OT注解』に向かう時間とは本体を書き始めた時間としては実は遅すぎると考えられる。

推測を可能とする方法は、ウェスレーの執筆過程と刊行のスケジュールの関係を決定づけることであるが、不運にもこれらを跡づける資料は極度に制限されている。ウェスレーはこのような大きな企画に継続的に取り組んでいるはずなのに、日記、手紙での言及が極端に少ないからである。一応、1766年12月24日に著作の結論が日程づけられているのでそれを下限とすることができる。

もし元来の刊行予定(一週間毎)が続いたとして、1766年2月23日の午後ウェスレーはLewshamに行き、ヨブ記の注解を終えていることが日誌で知られる。そしてヨブ記注解の結論部分は1766.11.20(執筆の270日後)に現れる。この二つへの言及は、『OT注解』の一部分についての現存する唯一の精確な情報である。すなわち、発刊のおおよそ9ヶ月前までの執筆の完了を示唆するのである。

刊行は1765年8月1日に始まっているので、創世記は「序文」の日付までに完成していなければならない。従って序文の刊行は9ヶ月後の1766年1月の中旬以降とすると、それに近い号は、申命記2~9章を扱ったものであった。ここから結論づけられることは、ウェスレーは「序文」に先立っておそらく最初の四書を完成させていたものと思われる。プール師の注解へ移行したという『OT注解「序文」』の内容もこれを説明する。さらに「序文」がテキストに基づいて、現れたという点も自然に説明できる。

これらを総合すると、ウェスレー『OT注解』の執筆の期間は1764年末の数ヶ月前から1766年の12月にかけてのほぼ二年強の間であったと推測でき

る。この期間中、ウェスレーは馬上の旅においては、絶えず座右の書のようにしてヘンリー氏とプール氏の注解書を傍らに、『OT注解』を書き続けたことになる。この結果が、総頁数2613頁、「序文」9頁の『OT注解』三巻本の誕生に至ったのである。

### VII 『注解』その後——むすびにかえて

1781年にリーズで行われたメソジスト年会に以下のような問答形式の議事録が残されている。

問：『OT注解』の売れ残りはどのようになされるべきか？

答：それらを、各週ごとにつき3ペンスで売ろう。

『OT注解』完全版の売れ残りが十五年近くもあったので、半額(1号につき6ペンスが予約価格)で売り出される決議がなされた。その結果について、ウェスレーはSarah Malletへの手紙で「ほとんど残っていない」(1788年)と述べているので、これは成功裡に終わったと考えられる。しかし、グリーンが報告するところではウェスレーの死後、メソジスト書庫にはなお七百五十部が売れ残ったままだったという。これは二五年を経た別の版(再販)があったという可能性が指摘されるが、第二版の証拠は現在のところ挙げられていない<sup>25</sup>。

この逸話は『OT注解』のその後を暗示するものとして興味深い。すなわち、1775年まで再販されなかった理由、あるいは『NT注解』のようにメソジスト神学の標準教理として採用されなかった理由について考えさせられるのである。研究者の幾つかの評価を紹介しながら、むすびのことばにつなげたい。

ウェスレーよりやや後の時代のメソジストの聖書注解者アダム・クラークは、その注解書の「一般序文」においてウェスレーの『OT注解』について短い評価を行っている。

「あらゆる面で『OT注解』は不十分かつ不満足と言われよう。これはほとんどの人が熟知していなかった環境のせいである。印刷業者のパイン氏は当

<sup>25</sup> Casto, op.,cit.,p.201.

初意図されていたよりもずっと大きなタイプでセットして印刷してしまった。最初の四巻という限られた大きさに収めるのは不可能とみられた。もっと縮小するか、それとも既に印刷されたものをキャンセルするか。前者が採用された結果、この著作は大衆の期待に届かなかった」

ここには内容そのものよりも、期待された分量および印刷技術上の見栄えに不成功の理由を帰しているが、当時の状況に最も近い意見として貴重である<sup>26</sup>。

ベーカーは「ウェスレーはどちらかといえばやはり新約が専門であり、…『OT 注解』にはそれ程内容的な独創性は認められず、ほとんどマシュー・ヘンリーあるいはマシュー・プールといった当時の旧約学者たちに依存した形であります」と述べる<sup>27</sup>。

クラッパーは『OT 注解』は史的には意義はなく、ウェスレー自身にとっても続く教会の指導者にとっても成功していない。…『NT 注解』よりも、史的かつ神学的に重要ではない」と評価する<sup>28</sup>。

マドックスは「神学者としてのウェスレーを読む」という論文の中で、『NT 注解』『OT 注解』の資料的価値を比較して論じ、『OT 注解』はウェスレーの神学的確信の指標としては大して信頼できない。特色的なテーマは、ウェスレーがその資料（筆者注：ヘンリー、プールの注解書）に付加訂正している箇所はほんのわずかしかない」とカストの統計(オリジナルは 0.83%)を低く評価するのである。さらにウェスレー自身が『OT 注解』に『NT 注解』ほどの地位を与えなかった主要な理由は「疑いもなく、旧約聖書が神の真理の証言であることを信じていた一方で、ユダヤ人の経験がキリスト者の経験の標準となることは信じていなかった」からだという<sup>29</sup>。

上記四者のいずれも『OT 注解』に肯定的な評価を与えていないように見え

<sup>26</sup> Arnett, op. cit., Adam Clarke, General Preface to Adam Clarke's Commentary. Vol. 1. p.8.

<sup>27</sup> フランク・ベーカー「説教と聖書教育」、山内一郎『メソジズムの源流』キリスト新聞社、2003年、115-6頁。

<sup>28</sup> Gregory S. Clapper, John Wesley on Religious Affections: his views on experience and their role in the Christian life and theology, The Scarecrow Press, 1989. pp.23-29.

<sup>29</sup> Randy Maddox, "Reading Wesley as Theologian," WTJ 30#1, 1995. pp. 32-33.

る。結論として『OT 注解』そのものへの評価は、カストがなしたようなテキストに基づいた資料批判に拠って、ウェスレーの神学を抽出する以外にはないと言うのが至当であろう。そもそもカストの研究の価値は、統計的分析にあるというよりも（そこから安易な結論を引き出すのではなく）、それに基づいたウェスレーの聖書釈義の方法論を緻密に分析してみせたところにあると言える。

それに拠れば「ウェスレーが付加した注解の（神学的）多様性の側面であり、またウェスレーが依って立つような、単一の圧倒的権威基準などなく、その代わりに（聖書）テキストの性格とその重要性について、自らの評価によって依って立つ方向性が決定づけられる」と述べられる<sup>30</sup>。

今回は『OT 注解「序文」』に限定して本文そのものの研究は次の課題としたいが、少なくとも『OT 注解「序文」』から教えられることは、ホーリネスに基づいた実践性と霊性の統合によって聖書は読まれて行くべきで、ウェスレーはその体現者であったと言える。

アーネットは『OT 注解』はなお読まれるべき価値がある」とするが、それはウェスレーが歴史的に制約を受けた聖書批評学的伝統の枠内で苦闘した営為を地道に掘り起こして行く中で、我々自身がそれらを現代的コンテキストの中で再評価して、聖書のキリスト教を取り戻して行くことではないだろうか。

(大阪キリスト教短期大学・神学科教授)

<sup>30</sup> Casto, op. cit. p.294.